

沖縄における地域語と「標準語」の間

長谷川 精 一

〈はじめに〉

船中では、就職の人々がたくさん居ましたので、三日間の船旅は楽しく、まだ見ぬ本土の事で、頭が一杯でした。でも沖縄の島が見えなくなつた時には、悲しさで涙が浮んで来ました。

：（神戸港に着いて迎える車の）途中窓から見える珍しい大都会のようす、汽車、電車、ほんとうに嬉しかった。神戸から二時間で私達の就職する工場に着きほっとしましたが、本土の方に比べて、顔の色が黒いので恥かしい思いをしました、そして沖縄の郷里のことが頭に浮かんで仕方ありません。でも私はこんな事に負けてはなるものかと、唇をかねで、その心を押さえました（「本土に就職して」泰久織物KK 上原弘子）。

今年度中学卒業者が沖縄から四〇名入社した。皆、色が黒く目がぱっちりとしたかわいい娘たちだ。沖縄独特な方言をまじえながらかわいらしい口調で話しかけた。私達も三か月前はあんなに黒かったが今では白くなっている。私達も少しばかりは先ばいになって来た。…ここにきて今でも一番つらい事は本土の人は沖縄という島に認識が足りないため、なにかにつけて沖

縄の人をあざわらう。例えばアメリカに支配されているとか、御飯というものをたべたことがあるか、時計はあるか、その他数え切れないくらい非常識なものいい方をする。そんなところを私達が沖縄はこういふところだと話しても信用できないという態度の人がいるので、それがどうも気に入らない。それでも吾等沖縄人はいつも明るく強く生きて行こうと手に手をとってはげまし合っている（「就職一年生」東海レイヨンKK 国吉真佐子^{*}）。

一九六二（昭和三七）年、琉球政府労働局職業安定課は「本土就職少年達」の作文を募集して審査し入賞者の文章を「本土就職少年少女作品集」としてまとめている。沖縄の中学を卒業するとすぐに集団就職で「本土」に来た少女たちは、「沖縄独特な方言」を封じて任地の言葉を話そうとし、「顔の色が黒いので恥かしい」「三か月前はあんなに黒かったが今では白くなっている」と語っていた。沖縄の人々にとって「沖縄独特な方言」と自己のアイデンティティとはいかなる関係にあったのか。本論においては、明治期以降、沖縄において行われてきた「標準語」教育の歴史的経緯を振り返り、そ

これから考えなければならないことは何かについて、考察していきたい。

（一）琉球語（沖縄方言）の歴史的経緯

沖縄師範学校を卒業して小学校の教師となった後、上京して改造社に入り編集者となっていた比嘉春潮は、関東大震災の際の状況に關して、次のように記している。

地震後の不安に加えて、朝鮮人が大挙して襲撃するという不穏なうわさが飛び、人びとの恐怖をかりたてていた。在郷軍人を中心に自警団が組織され、日本刀を差したのやら、竹槍をかついで物騒なのがそこらを徘徊した。…ある夜半、私たちは自警団の突然の訪問に寝入りばなを叩き起こされた。「朝鮮人だろ」「ちがう」「ことばが少しちがうぞ」「それはあたりまえだ。僕は沖縄の者だから君たちの東京弁とはちがうはずじゃないか」。押し問答をしているうちに、隣に間借りしていた上与原原という学生が出てきた。海軍軍医大佐で有名な人の弟で、沖縄にいたころアナーキスト・グループの中にいた人だ。彼も私の肩を持って、自分の知り合いの沖縄人だと弁明し、「なにをいっているんだ。日清日露のたたかいに手柄を立てた沖縄人を朝鮮人と一緒にするとはなにごとだ」。…戦前沖縄三中の校長になった豊川善睡君も、隅田川の橋の上で、自警団に朝鮮人でなければ「君が代」を歌ってみると歌わせられた…。不逞鮮人^{ふていせん}騒ぎでは、日本人もずい分やられたらしいが、とくに沖縄

人の場合、地方によっては強いなまりがあるから、逆上した自警団にはみわけがつかず、犠牲になった者があつたはずである。[＊]

比嘉が回想しているように、沖縄の人々への差別は言語と深い関わりがあつた。沖縄の教員たちはこの点を自覚しており、学校教育においては「標準語励行」を目的として「方言矯正」がなされていったが、それはいかなるものだったのか。兼次尋常高等小学校長、那覇甲辰尋常小学校長、那覇国民学校長として標準語励行運動を学校現場で実際に担っていた山城宗雄の一九三八（昭和十四）年の回想をみてみよう。（標準語励行の問題は自分が小学生だった三十年前から主張されていて、掃除当番や「方言札」や修身の成績からの減点などの罰則があつたが、あまり実績が上がらず）「県民が言葉のために、各地各所で差別待遇を受けたり、発展を阻害されたりした幾多の事実は耳に聒^この出来る位きかされて」いて、「全県民が普く標準語を励行する場合、その受くる福利と光明とはけだし莫大なるものがあらうことは、今更論を俟たない。時局重大なる際、県が黙すること能はず、国民精神総動員運動の一運動として、挙県一致、県民運動として励行してゐるのも当然だと思ふ。私は標準語使用の必要なことを力説し、方言使用の児童数を調べた。方言を使用した児童には指導をし、児童文庫を充実し童話会で発表の機会を与えた。そのうちに成績はだんだんとよくなり、「学校では勿論、家でも、児童はあまり方言を使はなくなつた。山に行くにも、野辺で働くときでも、標準語を使ふやうになつた。私達は、字や部落で、父兄や母姉に呼びかけた。意外に共鳴を得て、そろそろ

標準語専用の家庭も出来た。諸会合では必ず標準語を用ふことになった。卒業生や先輩や旅行者から、時々讀辭をいただくことがあった。地域のお爺さんやお婆さんたちも、孫たちと標準語で話す人も現れてきた。「教育の事業は、不撓不屈、不断的努力を払うところに実績が上り」、「教師、児童、父兄の三位一体となる協力」が大事だと確信した。「私は学校に来る用達の小僧や店員達が、所かまわず方言を大声連発してゐるのを注意してゐる。標準語生活の雰囲気、彼等外来者によつて攪乱され、破壊さるゝのをおそれるからだ。最も遺憾に思ふのは無自覚な役人や学生たちが屋内でも、街頭でも平気で方言を使つてゐる事である*」。

このような標準語教育が行われていた一九四〇（昭和十五）年に沖縄を訪れた柳宗悦ら日本民芸協会の一行は、座談会の席上で標準語励行運動を行つていた沖縄県学務部を批判し、沖縄の言葉を含めた沖縄文化を保存するように求めた。それに対して、沖縄県学務部側は、沖縄県人は標準語を十分に語り得ないことによつて差別を受けているのだと強く反論した。沖縄の三新聞は「敢て県民に訴ふ民芸運動に迷ふな」と題する沖縄県学務部の以下のような主張を掲載した。

七八年前の青年が因循姑息にして自己の意志発表は勿論儀礼さへ弁へぬ者の多かつたのに対し、今や其の精神的信念において、他人との応答において未だ充分とは言へぬが昔日の比ではなくなつた。其の最大理由は標準語普及によるものである。

：新入児童に方言交りで教授したのはつい五六年前であるが、今や如何なる僻陋、離島においても入学当初から標準語教授が

教育の能率を挙げてゐる。：旅先で道を尋ねてもはつきり標準語で返事してくれる田舎の老人、ハキハキとして自信に満ちた男女青年の応答振り、標準語奨励のお蔭で蔑視と差別待遇から免れたと感謝の消息を寄する最近の出稼移民群、新入兵の力強き本運動に対する感謝と激励の手紙！県出身兵の共通的欠陥たる意志発表が最近頓に良好に向ひつゝ、あるとの軍部の所見！我等は此処に本県振興の根本を暗示された如く無限の力強さを感じるものである。：本来県民が優秀なる素質を持ちながら、卑屈だ、引込思案だと言はれたり、或は祖先の偉大なる海外発展の進取性を失ひ、いたづらに消極退嬰となつたその最大原因の一つが自己の意志発表に欠くる結果であることを思へば、特質保存だの将来の標準語決定の資料だのと言つては居られない全県民の切実なる問題である*。

この声明を書いたとされる社会教育主事・吉田嗣延は、『沖縄朝日新聞』に「愛玩県」という文を投稿し、民芸家たちを批判して、「彼等の云ふ所はいつもかうだ。ゝわざわざ遠くまでやつて来たのだから奇らしいもの面白いものを残して貰はないと困る。彼等は余りにも県をその好奇心の対象にしてしまつてゐる。好奇心の対象にするのならまだしもである。もつとひどいものになると鑑賞用植物若くは愛玩用動物位にししか思つてゐないものもある。かゝる人々に限つて常に沖縄礼賛を無闇に放送してはゝまたかゝと思わせられるのである*」と述べた。

さらに吉田は『沖縄朝日新聞』に投じた「柳氏に与ふ」と題した文章で柳らを批判して記している。「県外にある一友人は『県外に

あつては標準語は命より二番目に大切なものだ」と悲痛な叫びを上げてゐる。「県人が標準語を十分に語り得ないため、如何ほど有形無形に損失を受けつゝあるか、従つてそれが如何に県人の繁栄を阻止してゐるかは枚挙に遑がない。このことたるや、他の生活様式の相違に相俟つて県人をして愈々苦境に陥れつゝあるのである。南洋に於ける県人が『ジャパンカナカ』と称せられ、大阪・台湾あたりに於ける県人が悲しむべき特殊の取扱ひを受けつゝあることを知るや否や^{*}」。

他方、日本民芸協会会長の柳宗悦は次のように反論した。「標準語も沖縄語も共に日本の国語である。一方が中央語であるに對し、一方は地方語である。是等二つのものは常に密接な關係を有し、国語として共に尊重せらるべきである」日本に現存する地方語のうち、「伝統的な純正な和語を最も多量に含有するのは東北の土語と沖縄語である」。とりわけ沖縄語は「国宝的価値をすら有する」。「私達が沖縄語に敬念を禁じ得ないの理由の一つは、寧ろ正しい標準語の樹立の爲であるとも云へる」、「地方人は地方語を用ゐる時始めて真に自由なのである。公用の場合には標準語を使ひ、私用の場合は土語を樂む。之をこそ言語の妙用と云ふ可きではないだらうか」、「今現に標準語を流暢に話し得る大部分の沖縄人は、「家庭で方言を用いつつ育った人たちである。人間は一語より出来ないような無能力者ではない。否、東京に生まれた私達は地方語を有たないことを物足りなくさへ感じる」、「沖縄に生まれて標準語より使へないような沖縄県人を私達は尊重しない」、「標準語を綺麗な発音と適宜な用語を以て一番正しく話してゐるのは沖縄県人である。あの

訛の激しい東北弁を想ひ、俗調に流れがちな大阪弁を想ふと、如何に沖縄県民が用ひる標準語の優れたものであるかを目撃する」、「国家の単位は地方である。地方性の薄弱は国家から特色を奪ふ。地方から生まれた言語を尊ぶことなくして、どこに一国の如実な表現を見出し得ようや」、「県民よ、標準語を勉強せよ。されど同時に諸君自身の所有である母語を振興せしめよ。それは必ずや諸君を確信ある存在に導くであらう。諸君は日本国民として不必要な遠慮に墮してはならぬ。県人よ、沖縄県民たることを誇りとせられよ^{*}」。

この論争は沖縄の新聞から舞台を移し、やがては東京の論壇をも巻き込み、標準語、国語、方言の關係を問う議論にまで展開されたが、両者の主張は最後までかみ合うことはなかった。

一九四五（昭和二〇）年の沖縄戦における日本軍の司令所の取締規定には、「爾今軍人軍属をヲ問ハズ標準語以外ノ使用ヲ禁ズ。沖縄語ヲ以テ談話シアル者ハ問課トミナシ処分ス」と記されていた^{*}。沖縄方言を話す者はスパイとみなして殺してもよい、とされていたのである。

敗戦後の米軍占領下においても、沖縄では戦前と同じ教員たちが戦後の教育を担っており、学校では再び、標準語励行運動が行われ、教員たちは祖国復帰運動において重要な役割を果たし、「方言札」や方言矯正のための指導が続けられた^{*}。一九四九（昭和二四）年に玉城村に生まれた高良勉による一九五〇年代の状況についての回想を見てみよう。

小学校一年生になつてはじめて日本語に出会い：日本語を使うのは学校の授業だけで、休み時間や家に帰ると琉球語が中心

であった。：高校時代まで、基本の生活はうちなーぐちだったように思います。：小学校三、四年生の頃から、「標準語励行運動」が盛んになり、毎週のように週訓は「共通語を使いましょう」になっていきました。そして校内に「方言札」が出廻るようになりました。：放課後まで方言札をもたされ、「週訓を守れなかった者」として担任から注意されます。それがたび重なると、放課後のこされて竹ぼうきの柄がバラバラになるまでおしりを叩かれることもありました。：しかも、その方言札が部落や地域にまで出廻るようになりました。おかげで、家に帰っても安心して琉球語が使えません。みんなだんだん無口になっていきました。^{*10}

沖縄教職員会は一九五五（昭和三〇）年から教育研究中央集会を開始したが、一九五七（昭和三二）年の第三回教育研究大会の国語分科会では、「正しいことばの指導はどのようにしたらよいか」というテーマで各地の教員からの発表があった。嘉手納小学校での家庭、校内、学年別、男女別「共通語使用実態調査」の結果として、「家庭に於ける標準語使用の状況」について、「○標準語使用家庭五・五九％、○方言使用の家庭 六四・九八％、○混用している家庭 二九・四三％」、「校内外に於ける調査」に関して、「○校内外標準語使用している児童 四・七〇％ ○校内のみ標準語使用している児童 七三・六〇％ ○教室外で方言している児童 一六・二四％ ○教室内外で方言を使用している児童 四・八二％ ○口をきかない児童 〇・六四％」という数字があげられており、古宇利小学校（名護地区）五・六年（複式）での指導の実例として、次のように

記されている。

一 学級子供会の問題として取り上げた。

○不正語表をつくること。

不正語を使つた人、直した人をホームルームの時間に直が発表する。

○学級不正語表を作る。

学級委員が一週間毎に日直日誌より整理して発表し皆で正しく直している。

○不正語使用者調べ

自分で直した者について記入させる。皆熱心に素直に直し合っている。家庭でも児童が中心になって直している。

二 ポスター 標語を作らした。

三 クラス会の問題として取り上げる。

○不正語を尋ねる札を作る。

○札を作りその動きによって不正語がどんなに利用されたかを調べる。毎日の反省会で委員がまとめて表を作る。

四 生活日記を通して指導する。

五 継続的に指導する。

不正語表から取り上げて反復練習する。児童の質問に答える。

六 言葉に関する記事をあつめさせて関心を高める。

七 クラス会を委員制にして全体に発表の機会を与えるようにしている^{*11}。

一九六〇年の新聞への投稿記事には当時の状況が以下のように語られている。

機会あるごとに共通語の問題を取り上げ、その必要性を説く者の一人です。それは言語の二重生活が諸教科の準備教育と言われる国語教育に如何に悪影響を及ぼすかを知ったからです。現在、沖縄（特に農村）では方言本位の会話を交わしている家庭があまりにも多いことに驚きます。お年寄りの方ならいざ知らず、共通語を巧みに使いこなす人ですら家庭で方言を使っている例は少なくありません。あたかも家庭は方言指導の場と錯覚を起こしているのではないかと思うことさえあります。せめて子どもに対しては共通語で話しかけたいものです。…一家揃って、共通語で語り少しでも子どもの負担を軽くすることは、学力向上の大きな鍵だと信じます^{*12}。

一九五〇年代後半から一九六〇年代には沖縄の若者の多くが就職のため「本土」へと向かった。一九六六（昭和四一）年三月八日から十一日にかけて那覇市安里の光明会館において、中学校卒業予定の男子五四名、女子一一七名を集めて行われた合宿訓練の記録が残っている。ここでは、訓練期間中は方言を使用してはならないとされ、教職員会事務局長沖縄祖国復帰協議会会長でもあった喜屋武真栄による講演においては、以下のように述べられていた。

次のことを注文致します。

(一) 沖縄は日本の一部なので他県人も沖縄のことをききた

がっている。外国視されないよう言葉づかい等に注意しましょう。方言は悪いことではないが誤解されるからです（沖縄の方言はとても上品で美しい）。

(二) 沖縄の方言の真の意味を説明して下さい。そして沖縄を紹介して下さい。

……

(八) 沖縄の南部には数多く（二百余）の碑が立っている。なるべく絵ハガキを手に入れて紹介するのもよい。沖縄の若い人々は日本のためにこのようにギセイになったんだと語って下さい。

……

(十二) 我々は日の丸をもてない悲げきの多い沖縄人であることを訴えてください^{*13}。

ところが、日本復帰が現実の政治問題となる一九六〇年代後半から一九七〇年台になり、方言を話せない子どもたちが出現するようになると、新聞には次のような投稿が掲載されるようになった。

わたくしは沖縄の人たちと、首里、那覇まがいの方言で話すが、それでは故郷に帰りきれない。ところが兄と安波言葉で話すとき―それさえもくずれているが―兄も私もうれしくなり、しみりもする。そして幼友だちや親しい国頭の人々の情愛が私たちを包むのである。一方わたくしには沖縄の方言のもつ素晴らしい価値が、ようやくわかってきた。それと裏腹に考えられるのは、方言撲滅運動を強調した沖縄県の過去の教育政策のぶざまさである。これは心の故郷をもぎとるものであった^{*14}。

さらに一九九〇年代になると、「スリー語やびら沖繩口（一九九三年（平成五）年、読谷村）」「ウチナーグチ大会」（一九九三（平成五）年、南風原町）、「なりとうゆん みやーく方言大会（一九九四（平成六）年、宮古平良市）」「島ぬくとうば語やびら大会（一九九六（平成八）年、県文化協会）など、沖繩の言葉の使用を推奨するための弁論大会が沖繩各地で開かれるようになった。

そして、二〇〇四（平成十六）年には「方言バッジ」なるものも登場した。二〇〇六（平成十八）年三月には、沖繩県議会で「しまくとうばの日」条例案が全員一致で可決された。『琉球新報』は伝えている。

話せる人が減っている「しまくとうば」（島言葉＝沖繩方言）を普及させようと、沖繩方言普及協議会（宮里朝光会長）は毎年九月十八日を「しまくとうばの日」に制定する運動を始める。行政も巻き込んだキャンペーンにしたいと考えて、独自のバッジを作り、日常生活でウチナーグチを使う機運を盛り上げていく。しまくとうばの日は、家庭の中で沖繩方言を使ったり、学校教育の場で話したりする環境をつくるのが狙い。「くとうば」の語呂合わせで九月十八日とする…呼び掛け文では「標準語励行を強いるあまり、しまくとうばを排除しようとした学校教育が間違っていたことを深く反省する。しまくとうばに愛着を感じ、沖繩の伝統文化に誇りを持った若者を育成する」と決意を述べている。しまくとうばバッジは、王家の紋章である「左御紋（ひじやいぐむん）」を参考にデザインした。胸につけることで、方言に関心があるという意味表示をす

る。全く話せない人でも、方言で声を掛けてもらうきっかけにしてほしいという。事務局長の宮良信詳琉球大学教授は「バッジによって心のバリアを取り払い、公の場でも方言で話す機会を増やしてほしい。いわば『逆方言札』です」と着用を呼びかけている。バッジは一個五百円^{*15}。

沖繩の言葉に対する県民意識についてみると、一九九六（平成八）年にNHKが行った「全国県民意識調査」では、沖繩県で「土地のことが好き」との返答が八三・〇％、「この土地のことが残すべき」との返答が八五・三％であったが、二〇一〇（平成二二）年の調査では、「土地のことが好き」は九五・〇％となっており、すべて全国一位であった。^{*16}二十歳代以上の話者人口は二〇一〇（平成二二）年の時点で五三四、八九九人（人口約一四〇万人）であった。^{*17}

〈二〉言語の階層性

前節では沖繩の言葉のたどった歴史的経緯についてみてきたが、言語の階層性という観点からは、どのようなことが考えられるだろうか。第一に、「地域言語」と「広域言語」との関係という点がある。特定の地域で用いられる言語（地域言語）とより広い範囲で用いられる言語（広域言語）との対比してみると、沖繩の言葉（琉球諸語）の中では、地域言語としての伊良部島、多良間島の言葉に対しては宮古島の言葉が広域言語であり、また、地域言語としての西表島、波照間島の言葉に対しては石垣島の言葉が広域言語

としてあげられるが、地域言語としての宮古島、石垣島の言葉に対しては沖縄本島の言葉が広域言語となる。さらに、地域言語としての「沖縄方言」に対しては「標準語」（日本語）が広域言語となる。

そして、全国各地域の「方言」を地域限定の言語として、日本国内では広域言語の位置にある標準語（日本語）も、世界全体から見れば地域限定の言語のひとつに過ぎないのであり、例えば地域言語としての日本語に対して、英語はより広域で通用する言語である。沖縄で標準語励行運動が起ったのと同様に、日本語よりも広域で通用する言語を日本語の替りに採用しようという見解が、明治期における森有礼の簡易英語採用論^{*18}から北一輝のエスペラント採用論、志賀直哉のフランス語採用論に至るまで、いくつも存在した。これらに対して、日本語は日本人の心と魂、日本人のアイデンティティ、貴重な公共文化財であるとして、日本語の消滅を危惧する次のような見解もある。

（五〇〇年後、世界にはたった一つの言語しかないという言語学者がいるが）「そのとき、日本語はこの地球上にはないのです。日本列島の少数言語語になつていくかもしれません。日本国さえ消滅しているかもしれません。これほどの恐怖はありません。：「祖国とは国語」であり、日本語なくしては日本はありません^{*19}」。

第二に、生後、幼児期に習得する言語である第一言語と、教育によって意識的に学び、身につける言語としての第二言語との対比が考えられるだろう。かつての沖縄の人々や「消滅しつつある言語」を「第一言語」とする人々は、第二言語として、より広域で通用す

る言語の習得を余儀なくされる一方で、「本土」の日本人や英語を第一言語とする人々は第一言語の使用のみで事足りる。言い換えれば、後者の人々は他言語習得の機会をもたず、「他者」への視点を自覚する機会、獲得する機会に乏しいと考えられる。

広域言語には二面性があり、プラス面としては、広域コミュニケーションへ参加するための道具となり得ること、そのようなコミュニケーションが他者を理解するための契機となり得ることがあげられよう。広域言語を用いることによって個人が活動の範囲を広げ、活動の内容を深めていく可能性も考え得る^{*20}。

マイナス面としては、第一に、広域言語のもつ力により地域言語が用いられなくなること、第二に、言語の階層性により言語差別が生じるという点があげられる。

第一の点に関して、現在、世界各地において、より広域で通じる「強い」言語に押されて、多くの地域言語が消滅に向かつており、地域言語によって表現されていたその地域独自の様々な経験知が失われつつある。^{*21}

柳宗悦は「今世界の公用語は英語である観があるが、日本人の自信は、一日も早く日本語を棄て英語に変へようと考えざることを許さない。確信が民族に生ずる時、凡て母語を熱愛するものである。一日も早くそれを棄てること等は要望しない。沖縄語を愛しない沖縄人があるなら、いくぢのない人間たるを意味する。県民は須らく公用語としての標準語と共に母語としての沖縄語を親愛すべきだと云ふのが吾々の信念である」、標準語と沖縄語の併用に反対する人があるが「さうなると日本人は外国語を勉強する事すら出来ぬ。一人

で二種の言葉が出来ぬ位野暮であつてはならぬ。沖縄に生れ沖縄で生活する沖縄人が、沖縄語を知らぬのは恥辱である。須く標準語と沖縄語を上手に使ひこなしていゝ。之は標準語より話せない東京人等の有ち得ない特権だとさへ云へる^{*22}と語ったが、沖縄で現実に起こったことは、地域言語の話し手であつた沖縄の人々が、広域言語としての日本語と自らの言語である沖縄の言葉とのバイリンガル（あるいはダイグロシア（公私二層言語状況）である時期、「標準語と沖縄語を上手に使ひこなす時期を経て、日本語の話者へと変わっていく」、UNESCOによつて、「八重山語」、「与那国語」が「重大な危険」にあり、「八丈語」、「奄美語（奄美方言）」、「国頭語」、「沖縄語」、「宮古語」が「危険」と認定される状況に至つてゐる、ということである。

第二の点に関しては、言語の階層性と「国語」との関係を考えなければならぬ。国民国家は国民統合のために言語の統一を図ろうとし、国民すべてに「国語」を普及するために国民教育を通じて「標準語」を強制する。国民すべてが同一の言語を用いるという建前が打ち建てられ、そこでは「方言」用は克服されるべきものとされるのである。東京文理科大学教授であつた保科孝一は「思想の善導に関しては、まず言語の統制をはかることが第一義である」とし、次のように述べてゐる。

国民固有の精神は純粹正雅な言葉によつて培われるのが当然である。ゆえに国民の言葉はできるだけ品位を高めていかなければならぬ。…方言俗語を口にする人には、どうしても敬意を表する心持が起こらない。…標準語による国民文学を自由に味

読する力がなくては国民精神を培うことも意のごとくならないわけである。…日本国民としては、現在の標準語により、社会生活を営むべきは理の当然で、できるだけ方言俗語を避け、人格品性を堅持するように努めなければならぬ。人格品性の向上は、その国の純粹正雅な標準語によらなければ出来ないものであり、ことに社会的活躍はまったく不可能なものといつて差支ない。^{*23}

保科が言うように、標準語を話せるか否かは「人格品性」の問題とされ、標準語が話せない者は国民共同体のメンバーである資格がない者だとされる。標準語に対比されるものとして「方言」という概念が生み出されるにもかかわらず、「国民精神」は標準語によつてこそ培われるという想定によつて、「標準語を話せない者」を有徴化し、同質的であるべき国民ではない者として差別・排除しても当然だという言説が正当化される。「まともな普通の日本人」は国語としての日本語を話し、標準語を話せない日本人は「まともではない、変な日本人」「日本人のなり損ない」とされるのである。このような言説においては、差別する側である「まともな普通の日本人」は無徴であり、差別される「まともではない、変な日本人」は有徴であるとされる。そこには、差別される側はアイデンティティ（自己同一性。「自分は何者か」に関する自分自身の認識）を問われるのに対して、差別する側はアイデンティティを問われないといふ、差別一般に成り立つ機制が見られる。^{*24}

この機制は、差別する側の優越感と、差別される側の劣等感を生み出し、階層性の中で順次、差別される側はさらに差別される者を

見出し、見下ろすという差別の移譲をもたらすだろう。前述の比嘉春潮の関東大震災の際の回想における、自分たちは日清日露の戦争で武勲を立てた立派な日本人である沖縄人だ、朝鮮人と一緒にするな、という発言は、そのような差別の移譲を示している。「方言札」を首からかけさせられた生徒が、方言を話している他の生徒を探して札をその生徒に回すという規則は、階層性をつくり出し、差別の移譲を行うという機制に符合するものと考えられる。

（おわりに）

本論では、沖縄の言葉をめぐる歴史的経緯についてみてきたが、そこから示唆されることはどのようなことか。

第一に、「日本人」とは誰か、という点である。沖縄県設置以降、学校教育を通じての琉球語（沖縄方言）の標準語への矯正がなされ、標準語励行運動が起り、戦後の早い段階で教育言語を日本語と定め、祖国復帰運動を経て、本土就職の必要からも共通語習得が主張され、復帰後しばらくして沖縄方言の再評価がなされるようになるも、琉球語は話者の減少とともに危機言語に数えられるようになる、という歴史的経緯は、明治初期の琉球処分から沖縄戦を経て日本復帰を果たし現在に至る沖縄の人々の歩んだ道と軌を一にしている。

沖縄の人々は近代国家が確立されていく中で「日本人」にされ、自らも「日本人」になろうとしたが、アジア太平洋戦争の日本の敗戦で米国支配下の「非日本人」にされ、さらに祖国復帰によっ

て「日本人」になろうとし、米軍軍事基地のもたらす一方的な負担を押しつけられつつ再び「日本人」となった。日本国家の都合と国家間の力関係によって翻弄されてきたこのような沖縄の人々の経験は、「日本人」なるものの不確実性を示している。「日本人として生まれた者が日本人である」というような「民族」「国民」の実体化の言説とは裏腹に、「自分は日本人である」というアイデンティティが個人の願望や志向を越えて歴史的條件によって偶発的に決定されてしまうことが、そこには明示されているのである。そのことは、大日本帝国の旧植民地であった地域の人々の経験によっても、同様に示されている。^{*25}

第二に、「愛郷心」と「愛国心」と「国際社会」との関係という点である。言語学者の柴田武は以下のように記している。

地域語の自覚から、その土地への愛（郷土愛）を呼び起こすことができることを述べた。郷土愛は結局のところ愛国心につながる。郷土愛のない愛国心は、きわめて抽象的な、まぼろしのようなものでしかない。…「地域語による教育」、「地域語の教育」の目標が何だと言われれば、愛国心を持った国際人の形成、ということになる。^{*26}

また、二〇〇三（平成十五）年の中教審答申「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」は次のように述べている。

グローバル化の中で、自らが国際社会の一員であることを自覚し、自分とは異なる文化や歴史に立脚する人々と共生していくことが重要な課題となっている。このためには、自らの国や

地域の伝統・文化についての理解を深め、尊重する態度を身に付けることにより、人間としての教養の基盤を培い、日本人であることの自覚や、郷土や国を愛し、誇りに思う心をはぐくむことが重要である。こうした自覚や意識があつて初めて、他の国や地域の伝統・文化に接した時に、自他の相違を理解し、多様な伝統・文化に敬意を払う態度も身に付けることができる。

このような資質を基盤として、国際社会の責任ある構成員としての自覚を持ち、世界を舞台に活躍し、信頼され、世界に貢献できる日本人の育成を目指す必要がある。^{*27}

ここでの提言を受けて、二〇〇六（平成十八）年改正の「教育基本法 第二条 五」は、「伝統と文化を尊重し、それらをはぐくんできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと」と定めている。^{*28}

しかし、「愛郷心」と「愛国心」と「国際社会」は、果たしてこのように予定調和的に単純に結びつくものだろうか。柴田が述べるように、地域語の自覚から、その土地への愛（郷土愛）を呼び起こすことはできるだろう。しかし、沖縄の言葉がたどった経緯を考えると、「郷土愛は結局のところ愛国心につながる」などと簡単にいうことはできない。

琉球諸語の話者が減少し、危機言語に数えられるようになるまでには、学校教育を通じて国語（国家語）としての日本語（標準語）を沖縄の人々に強いていった長い歴史がある。前述した広域言語としての魅力から、生徒たちの将来を思って沖縄の教師たちが標準語励行運動を進めていったとしても、その前提には、「ソテツ地獄」

と表現されたような、また、移民や「本土」への集団就職を余儀なくされたような沖縄の窮状、「本土」との経済的格差が、そして、「本土」の就職先や軍隊等における酷い言語的差別があつたことを忘れるわけにはいかない。^{*29}

上述の沖縄言語論争に関連して、柳宗悦は「国民精神の作興は地方文化の否定を伴つてはならぬ。強固な地方の集団にして、始めて強固な国家を形成し得るのである。単なる画一的統一は地方を去勢せしむるに過ぎない。日本は活々とした地方の統一ある結合でなければならぬ。標準語を学ぶと同時に沖縄語を愛せよと叫ぶのは、沖縄の独自性を活かしたくないからである。さうして独自の沖縄の存在こそは、日本にとっての此の上ない歓喜である」と述べたが、「本土」の首都・東京で生まれ育ち生涯を終えた柳の言説とは無関係に、沖縄の教員たちが標準語教育に積極的に関わり、学校、家庭、地域社会が一体となつて標準語励行に努め続けたのは、「標準語」の習得が、差別から脱却し、沖縄と「本土」との政治的、経済的、社会的、文化的格差を何とかして縮めていくために有効であると判断していたからであつて、「強固な地方の集団」をつくつて「強固な国家を形成」することを課題としていたからでも、「日本にとつての此の上ない歓喜」を熱望していたからでもない。

「方言札」に象徴されるような、第一言語としての沖縄の言葉から異言語である日本語への言語の取り換えの経緯について、また、激しい地上戦において甚大な被害を被った沖縄戦の後、現在に至るまで続いている米軍基地の島としての沖縄の現実を考える時、「郷土愛は結局のところ愛国心につながる」などとは決して言えない

し、「我が国と郷土を愛する」ことの中で「我が国を愛する」ことと「郷土を愛する」ことが分断され、相矛盾せざるを得ない事態こそが、まさに現実であることを認識せざるを得ないのではないか。

そして、「国際社会」として表現されているものの実態は何かについて、再考を要する。この点について考える上で、サンフランシスコ平和条約の草案作成に関わりアイゼンハワー大統領の就任とともに国務長官に就任したジョン・フォスター・ダレスに関する酒井直樹の以下のような言及は示唆に富む。

酒井は、ダレスの対日本政策には「日本人は人種主義者になってもらわなければならない」という戦略があったとし、日本人は近代化されていないアジアの諸国民に対して密かな優越感をもっており、「西洋側 (Western Alliance)」＝「アングロサクソンのエリートクラブ」のもつ社会的地位に惹きつけられているとダレスは感じていた、とする。酒井は、ダレスが日本人に期待したのは、「日本人が『エリートクラブ』に入ることを拒絶し、ダレスの（そして当時の政策決定者一般の）エリート根性の前提になっている世界を人種の位階としてしか見ることでできない意識そのものを軽蔑する」という選択肢を選ぶ蓋然性が低くなるような政策を実施することであつた、と述べている。酒井は記す。

「期待される日本人像」で注目されている人種主義者になるということとは、たんに人種主義に賛同したり、参加することではない。人はすでに人種主義の中にいるのであって、人種主義を衣服のように着けたり脱いだりするわけにはゆかない。そうではなく、「期待されて」いたのは、人種主義から脱出する未

来を希望することを放棄することであり、人種主義の現存を告発することをやめることなのである。それは、人種主義のない未来を目指すことによって、現存する世界を変える希望を見捨てることである。…期待された日本人は、世界を階層化する秩序に反省的な意識をもつてはならないのである。人種主義からの脱出を希求するとは、現に存在している人種秩序に対して根底的な違和感を持ち続けることであつて、西洋と非西洋が階層的な秩序に収まっていることを拒否することである。…彼が日本人に期待したのは、世界秩序の基本を告発するような傲慢さをもたない、世界の秩序を受け容れ、そのなかで身の程相應の立場を喜んで引き受けることなのである。それは、いわば、反省意識をもつ主人と即自的な秩序のなかで主人による認知を求め、下僕の役割分担のなかの下僕の役割を引き受けることであつた。さらに、日本人が体制翼賛型の少数者としての振る舞い自身につけることであつた。^{*31}

酒井が指摘するように、「世界を人種の位階としてしか見ることでできない意識」によつて、「西洋と非西洋が階層的な秩序に収まっている」世界、人種主義が現存する世界を「国際社会」として是認して、それに対する貢献を説くことは、「人種主義から脱出する未来を希望することを放棄すること」に他ならない。

そのような現存の世界秩序は、文化・言語の同一性に基づく複数の国民共同体が並存している状態とされ、その国民共同体の内部は均質的で自己完結的で調和的であり、国民の間では失敗や障害なくして相互理解が可能となるコミュニケーションがすでに保証されて

おり、互いに共感し合えるとされる。そして、言語に関してしばしばみられるように、微細な差異が指標として知覚されると、それは「われわれ本来の国民」とは異質な「出来損ないの国民である彼ら」を区別し差別するための指標となる。

しかし、「出来損ないの国民である彼ら」や、容易には共感が成り立たず誤解や敵対の可能性の高い他国民との対話を拒否して、国民共同体の内部に引き籠もって自己憐憫しつつ「自国の誇りを傷つけられた」と騒ぎたてて自国への「愛国心」を声高に叫ぶよりも、まず先にしなければならいことがあるはずだろう。

それは、まず、「日本人」と自己規定している人以外の人々（歴史上のいずれかの時期に「日本人」であった人々も、一度も「日本人」ではなかった人々も含めて）から「愛される国」になることではないのか。そもそも、他から「愛されている」という実感をもてないような自国を本当に愛することなど、できるだろうか。

それでは、「愛される」国となるために必要なことは何か。その国の人々が、出自や出身の国によって人間を分類し、「ああいう出だからこうだ」「何人だからこうだ」と先入観で判断して人を差別するような人間観から脱出し、誤解や敵対、容易には共感が成り立たない状況を乗り越えて、相互の利害を調整し得るように説得する努力を続けるならば、様々な困難を乗り越えて他者と共に生きていくとする普遍的な社会性を希求するならば、その国は、広く世界の中で敬意の対象となり、「愛される」国となるのではないか。

沖縄の人々が、「この国に生まれて良かった」と心から思うことができるようになる日が来るまでは、また、この国に暮らす人々の

うち、一部の人々にのみ不当な負担を押しつけながら、それが差別として批判されない間は、日本は真に「愛される国」にも、「愛すべき国」にも、なれないだろう。沖縄の言葉の、そして、沖縄の人々の経てきた歴史的経緯から考えなければならないことは、ますます増大する一方である。

註

*1 「琉球労働」、第九卷二号、三七頁、三六頁（沖縄公文書館、「琉球労働第九卷 第一号一九六二／一〇／五、一九六二／一〇／三一、出所／編・著者・琉球政府労働局労政課、発行／出版・琉球政府労働局労政課、本土就職少年少女の作品集、資料コード：G8004533B、紙通常 公開 書架コード：02-A0201」。

*2 比嘉春潮「沖縄の歳月―自伝的回想から」、一〇八頁、一一五頁、一九六九年、中公新書。「朝鮮人でなければ「君が代」を歌ってみる」――日本の国歌を歌うことは日本人であることの証左であるという現在も続いているこの「踏み絵」は、「自分たち」と他者とを区分し、他者を排除しようとするものである。少数者の反乱を恐れる多数者の恐怖心が表れているという点で、この関東大震災の際の事例は、沖縄戦の際の日本軍による沖縄の人々に対するスパイ視と共通している。

*3 山城宗雄「標準語励行の問題」（「沖縄教育」、第二七三号、昭和十四年五月）。なお、山城に関しては、長谷川精一「沖縄における標準語励行と教師―山城宗雄の教育実践―」（『教育文化』（同志社大学社会学部教育文化学研究室）、第十八号、二〇〇九年）を参照されたい。

*4 「敢て県民に訴ふ民芸運動に迷ふな」（『琉球新報』『沖縄朝日新聞』『沖縄日報』一九四〇年一月八日）。引用は『那覇市史 資料編第二巻中一三』那覇市総務部市史編集室編、一九七〇年、三五六頁から。なお、柳宗悦ら日本民芸協会の沖縄県学務部に対する批判が発端となったこの論争に関しては、長谷川精一「沖縄言語論争」再考（辻本雅史

編「知の伝達メディアの歴史研究 教育史像の再構築」、思文閣出版、二〇一〇年、所収）を参照されたい。

- *5 吉田嗣延「愛玩泉」〔沖繩朝日新聞〕一九四〇年一月一〇日。引用は『那覇市史 資料編第二巻中一三』、三七五頁から。

- *6 吉田嗣延「柳氏に与ふ」〔沖繩日報〕一九四〇年一月十六日。引用は『那覇市史 資料編第二巻中一三』、三六一頁から。「カナカ」は太平洋の島々の住民に対する俗称である。

- *7 「国語問題に關して沖繩県学務部に答ふるの書」〔月刊民芸〕一九四〇年三月号。引用は『柳宗悦全集』第一五巻、筑摩書房、一九八一年、一四八頁から。

- *8 「球日命 第八七号 四月九日 球軍日々命令」〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref. C11110035100、第三三二軍司令部 日々命令綴 (第三二軍司令部参謀部航空) 昭和二〇年三月二十九日～二〇年五月二二日 (防衛省防衛研究所)』、五頁。

- *9 沖繩戦後の標準語教育に關しては、長谷川精一「戦後」沖繩における「標準語」指導」〔相愛大学研究論集〕、三〇巻、二〇一四年）を参照されたい。

- *10 「発言・沖繩の戦後五〇年」、ひるぎ社、一九九五年、一九頁。

- *11 「沖繩教育 第一集」第五号、沖繩教職員会、一九五七年八月、十二頁、一二頁、四〇頁、二八頁、二七頁。

- *12 「沖繩タイムス」一九六〇年九月十二日夕刊、四面。

- *13 「本土就職希望者合宿訓練」(沖繩県公文書館 資料群・労政課/労働調査課/職業安定課/名護公共職業安定所/コザ一般職業訓練所/他資料群解説・沖繩内職公共職業補導所 シリーズ・職業安定及び職業訓練に關する書類 タイトル・本土就職希望者合宿訓練 一九六六年資料日付・一九六六/六/一～一九六六/六/一 出所/編・著者：琉球政府労働局職業安定課 閲覧用コード：R00092065B I04-004 紙 通常 一部公開 収納コード：R00092063H 書架コード：09-N-1201)。

- *14 「沖繩タイムス」一九七〇年十月二〇日朝刊、四面。安波は沖繩県北

端の国頭村の一集落。ここの言葉は、首里、那覇の言葉よりも奄美の言葉に近い。

- *15 「琉球新報」二〇〇四年十月十五日(下図は「方言バッジ」の図柄(沖繩語普及協議会のホームページ <http://www.4ocn.ne.jp/knaka/hogen/>)の「しまくとうば」バッジ関連記事)の「琉球新報 二〇〇四年十月十五日」より)。

- *16 NHK放送文化研究所「全国県民意識調査」一九九六年、相澤正夫「方言意識の現在をとらえる」二〇一〇年全国方言意識調査」と統計分析」(国立国語研究所「国語研プロジェクトレビュー」第三巻一

- 号、二六～三七頁。
石原正英「琉球語の存続性と危機度」(「東アジアにおける言語復興」、三元社、二〇一〇年、一四九頁)。

- *17 森有礼の言語観に關しては、長谷川精一「森有礼における国民的主体の創出」、思文閣出版、二〇〇七年の「第三章 森有礼の「簡易英語」採用論」を参照されたい。

- *18 津田幸男「日本語の攻防 他言語と日本語「日本語保護法」の制定を急げ！日本の言語と文化の安全保障のために」(「日本語学」第三一卷十一号、二〇一二年九月、明治書院、七一頁)。

- *19 それは同時に、言語習得は本人の「個人的能力・資質」に還元されるということであり、それは「方言札、標準語教育(言語矯正)を教員が生徒に強制することが正当化される理由である」。

- *20 UNESCOは今世紀末までに世界中の六〇〇〇余の言語のうち、半分以上が消滅するだろうと推定している(UNESCO Atlas of the World's Languages in Danger (<http://www.unesco.org/languages-atlas/>))。

- *21 柳宗悦「柳宗悦手記」(前掲『柳宗悦全集』第十五巻、五九五頁)。

- *22 保科孝一「言語に対する社会的制裁」(「国語教育」二四卷二号、一九三九年二月、五頁)、保科孝一「沖繩における標準語問題」(「国語教育」二五巻五号、一九四〇年五月、二～四頁(「沖繩教育」第二八一

- 教育」二五巻五号、一九四〇年五月、二～四頁(「沖繩教育」第二八一



号、一九四〇年一月に転載)。

* 24

この有徴と無徴との差異に関しては、本論冒頭であげた、本土就職をした少女たちが自分たちの肌の色が「黒い」ことに言及していたことを想起すべきであろう。そこでは沖縄の人々は「黒い」人々、「本土の日本人」は「黒くない」人々とされている。「人種」を自然化し、世界は「白人」と「有色人種」の階層序列であるとして差別を生み出してきた認識においては、「白くないこと」＝黄色や赤色や黒色など、有色であることが有徴であり、「白い」ことが無徴であるとされてきた。そして、「白くないこと」の中にも、さらに階層序列があるとされる。

「日本人」と自認する人々がもっているアジア、アフリカ、アラブの人々への優越感と「白人」への劣等感は、このような認識に基づくものであろう。

* 25

二〇〇〇年四月九日の石原慎太郎・元都知事の発言にその典型例を見よう。「三國人」(日本の統治下に置かれていた旧植民地の住民)を差別する言説が示すのは、「三國人」がかつて「日本人」であった歴史的事実を忘却したかのような振る舞いであり、それは「日本人」に関して勝手な思い込みに基づく実体化をして自分は「まともな日本人」であると信じている者が、世界を人種の序列として見て、「三國人」への優越感をもって語るものであり、そのような認識は、見せかけの反米のポーズとは異なり、「西洋人」への劣等感と一体のものであって、差別の移譲の機制を表すものに他ならない。そこには、上述の比嘉春潮が関東大震災の際の経験として語った自警団の場合と同様に、少数者の反乱を恐れる多数者の恐怖心が表れている。

* 26

柴田武「地域語による教育、地域語の教育」(『文学』、第四九巻九号、岩波書店、一九八一年九月、一〇二頁)。

* 27

「新しい時代にふさわしい教育基本法と教育振興基本計画の在り方について」(答申)二〇〇三年三月二〇日、中央教育審議会 (http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyō/chukyō0/toushin/030301.htm)

* 28

「教育基本法」(平成十八年十二月二十二日法律第二十号) (<http://law.e-gov.go.jp/htmldata/H18/H18HO120.html>)

* 29

一九四四(昭和十九)年に大阪滞在中に陸軍に入隊した新垣清保は以下のように述べている。「一番つらかったのは同じ沖縄出身の兵隊の中に言葉やしきたりが違うために軍隊生活になじめず、殴られたりひどい目に遭ったりする人がいることでした。…上官に尋ねられてわかってても、言葉が出ずに殴られると云うようなことがよくありました。私の知っているだけでも二人の人が軍隊生活に耐えられず、精神に異常をきたしました(ステイプ・ラブソン「在関西のウチナンチュ——本土社会における歴史と差別・偏見体験」(法政大学沖縄文化研究所『いくつもの琉球・沖縄像』、法政大学国際日本学研究センター、二〇〇七年、二八二頁)。

* 30

柳宗悦「琉球文化の再認識——沖縄県知事に呈するの書」(前掲『柳宗悦全集』第十五巻、一八三頁)

* 31

酒井直樹「倒錯した国民主義と普遍性の問題 日本国憲法をめぐる」(『現代思想』、第三四巻二〇号、二〇〇六年九月、二三三頁)。

* 32

同盟関係にある国々だけの友好関係を主張し、「対等なパートナーシップ」を唱えても、世界を直視すれば、そのような認識が誤りであることを示す事実はいくらも隠しつけない。一九九五年に沖縄で起きた米国海兵隊兵士による少女誘拐強姦事件は、米国軍事基地が治外法権の領域として設定されている事実を明示するものであった。繰り返される米軍基地周辺での被害は、日米の「対等なパートナーシップ」という言辞が全くの虚偽であること、米国と日本とが支配・従属の関係(主人・下僕の関係)にあること、そして、「日本」の一部であるはずの沖縄へ過重な負担を押しつけてきたことを黙認しているのが日本の現実の姿であることを明示するものに他ならない。このような状態が続く限り、世界に誇る「美しい日本」などと自画自賛したところで、感傷的で無媒介的な「日本人」内部の共感をもつ人々以外の世界中の人々にとって、何ら説得力をもたないだろう。